

## 認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学び

－第一報 専門職の援助過程-Process-に着目して－

木下 香織<sup>1)</sup>\*・難波 香<sup>1)</sup>・安藤 亮<sup>1)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2020年11月18日受理)

本研究の目的は、認知症対応型共同生活介護でのA大学看護学科の老年看護学実習における、認知症高齢者への専門職の援助過程についての学びを明らかにすることである。本研究に同意が得られた4年生が提出した老年看護学実習総括用紙のうち、実習目標4：高齢者の健康問題と生活機能に視点をのいた専門職の援助過程を理解する(Process)に記載された内容について、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。学びは111コードが抽出され、31サブカテゴリー、10カテゴリー、【諸機能の低下に配慮して交流を促すアプローチ】【生活の質を高める多面的な支援】【多職種支援】の3つのコアカテゴリーで構成された。学生は、認知機能低下によって生じるコミュニケーション障害や不安に配慮した対応や、利用者の生活の質に関わる多面的な支援について学びを得ていた。受け持ちを持たない実習形態がもたらす多様な学びが得られていることが確認できた。(キーワード) 認知症高齢者、看護学実習、グループホーム、援助過程

### I 緒言

わが国における高齢者人口は2042年にピークを迎えたのちに減少に転じる一方、高齢化率は2018年10月には28.1%に達し、今後も上昇を続けることが見込まれている<sup>1)</sup>。高齢者人口、なかでも75歳以上の後期高齢者人口の増加が続くことが推計されており、人口の高齢化の伸展に伴い、認知症をもつ人も増加している。わが国においては2012年に認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)の発表ののち、2015年には認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)の制定を経て、2019年6月18日に認知症施策推進大綱をまとめ、「共生」の基盤の下、社会参加活動や学習との活動などを推進する通いの場の拡大など「予防」の取組を政府一丸となって進めることを宣言している<sup>2)</sup>。認知症をもつ人の増加への対策はわが国において喫緊の課題であり、施策の整備が進められている状況である。介護保険制度の制定や「認知症」への名称変更などを契機に、特に高齢者福祉の場での認知症ケアの質の向上に向けた取り組みがなされてきた。一方、急性期病院では、治療優先あるいは安全管理の立場から認知症ケアの質に課題があり、日本老年看護学会による「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明<sup>3)</sup>や「認知症ケア加算」の算定など、臨床看護実践における認知症をもつ人への対応への課題を改善すべく、取り組みが進められているところである。

看護学生の臨地実習においても、受け持ち患者の年齢も

高齢化しており、認知症をもつ患者の看護を経験することもしばしばない状況にあり、コミュニケーションなどの対応困難を感じたことが近年でも多数報告されている<sup>4-7)</sup>。

A大学看護学科の老年看護学の実習は、認知症対応型共同生活介護(以下、認知症グループホームとする)での実習(以下、老年看護学実習とする)と、在宅高齢者を対象に学生と教員が介護予防活動を実施する実習で組み立てられている。認知症高齢者を対象とする実習は、認知症グループホームにおいて受け持ちの利用者を定めない、看護過程の展開を用いない実習形態である。他の看護基礎教育機関においても、認知症グループホームでの実習を取り入れた学習成果の報告はいくつかみられる<sup>8-11)</sup>が、A大学のように認知症グループホームで2週間にわたる臨地実習を展開している看護基礎教育機関は少ない。また、A大学の老年看護学における臨地実習の評価においては、認知症グループホームでの臨地実習に取り入れた教育方法の評価<sup>12・13)</sup>や臨地実習期間に設けている学内演習の効果<sup>14・15)</sup>についての検証をおこなってきた。

本研究では、認知症グループホームでの老年看護学実習における認知症高齢者への専門職の援助過程についての学びを明らかにすることを目的とする。

### II A大学看護学科 老年看護学実習の概要

A大学看護学科では、老年看護学の臨地実習4単位のうち、2単位を認知症グループホームにて、受け持ち利用者を

\*連絡先：木下香織 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

もたない形態の実習を、残り2単位は地域高齢者を対象とした介護予防活動を行っている。

本研究は前者の実習に関する報告である。実習目的「老年看護の対象者としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者自身の人権を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う」に基づき、実習目標を9項目（表1）で構成している。認知症グループホーム1ユニットに4名の学生を配置し、学生はスタッフの提供する援助への参加や利用者とのコミュニケーションを中心とした実習を行う。本研究では、実習目標4：高齢者の健康問題に関わる専門職の援助過程を理解する（Process）についての学びを明らかにする。

表1. A大学看護学科 老年看護学実習の目的・目標

#### 〈目的〉

老年看護の対象者としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者個人の人権を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う。

#### 〈目標〉

1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する。(person)
2. 高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する。(problem)
3. 高齢者の生活の場を理解する。(place)
4. 高齢者の健康問題と生活機能に視点をおいた専門職の援助過程を理解する。(process)
5. 高齢者のQOLとそのゴールを理解する。(purpose)
6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する。(perspective)
7. 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する。(professionalism)
8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する。(person-in-environment)
9. 学習の成果と今後の課題を明確にする。(progress)

### III 研究方法

#### 1. 対象

A大学看護学科2019年度の4年生58人のうち、本研究への同意が得られた47人。

#### 2. 方法

##### 1) データの収集

研究対象者の提出した老年看護学実習総括用紙に記載された内容を分析対象とした。

##### 2) 分析方法

目標4：高齢者の健康問題と生活機能に視点をおいた専門職の援助過程を理解する（Process）に記載された内容について、その意味内容1つごとに文章をまとめる、または文章を区切ってデータ化をおこない、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。分析は、研究者間で合意が得られるまで複数回、実施した。

#### 3. 倫理的配慮

成績判定終了後、研究責任者から対象者に、文書を用いて本研究の目的と方法、個人情報の保護や研究参加に関する利益・不利益等の倫理的配慮について説明した。研究協力に同意が得られる場合は同意書への署名を求め、同意が困難な場合は白紙のままでの提出を求めた。説明当日、研究対象者が当該講義室の使用を終了する予定時間を期限として、室内に設置した回収箱にて回収した。同意書提出後、研究対象者が同意の撤回を希望する場合は、研究者に口頭で伝えてもらい、同意撤回書の署名を求めた。データは個人が特定できないように、匿名化して取り扱った。対象者の同意の撤回への対応のため、データは連結可能匿名化にて取り扱った。

本研究は、新見公立大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：191）。

### IV 結果

本研究への同意が得られた47人の老年看護学実習総括記録から、実習目標4：高齢者の健康問題と生活機能に視点をおいた専門職の援助過程を理解する（Process）に関する学びを抽出した。1人の学生の記録から1～5個のコードが、合計では111コードが抽出され、31サブカテゴリー、10カテゴリー、【諸機能の低下に配慮して交流を促すアプローチ】【生活の質を高める多面的な支援】【多職種支援】の3つのコアカテゴリーで構成された（表2）。

本文中の【】はコアカテゴリー、《》はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、「」はコード、『』はコードの中にある会話の部分、（）は意味が分かるように付け加えた内容を示す。

#### 1. 【諸機能の低下に配慮して交流を促すアプローチ】

このコアカテゴリーは、《認知機能の低下による障害を補う関わり》《認知機能低下に伴う利用者の不安に配慮し、心に寄り添う関わり》《相互作用の促進を目指す丁寧な対応》《非言語的コミュニケーションの積極的な活用》という4つのカテゴリーで構成された。

##### 1) 《認知機能の低下による障害を補う関わり》

このカテゴリーは、〈繰り返しの話題に丁寧に対応する〉〈繰り返しの話題を個別的な対応に発展させる〉〈個人の理解度に合わせて説明する〉〈視覚情報や説明で利用者の理解を助ける〉〈利用者の混乱を防ぐ関わり方〉という5つのサブカテゴリーで構成された。

〈繰り返しの話題に丁寧に対応する〉は「繰り返される話の反応を大切にしかかわる」など4コード、〈繰り返しの話題を個別的な対応に発展させる〉は「繰り返される話をどう聞くかで、利用者の方の気持ちの充実感や自尊感情を高めることもできる」など5コードで、短期記憶障害により同じ話題を何度も繰り返す利用者に対して、繰り返される話題に起因する利用者の心情にも配慮して丁寧に関わ

表 2. Processに関する学びの記載内容

コア カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
諸機能の 低下に 配慮して 交流を促す アプローチ	認知機能の低下による障害を補う関わり	繰り返しの話題に丁寧に対応する	21
		繰り返しの話題を個別的な対応に発展させる	
		個人の理解度に合わせて説明する	
		視覚情報や説明で利用者の理解を助ける	
	認知機能低下に伴う利用者の不安に配慮し、心に寄り添う関わり	利用者の混乱を防ぐ関わり方	8
		利用者の感情に焦点を当てて関わる	
	相互作用の促進を目指す丁寧な対応	利用者の言動の向こうにある思いを汲みとり、不安にならないように対応する	12
		聴く姿勢を示す	
		利用者が話しやすい雰囲気づくり	
生活の質を 高める 多面的な 支援	相互作用の促進を目指す丁寧な対応	利用者の個性やその時の心情に合わせてコミュニケーションをとる	13
		利用者の言葉を否定しないで受け止める	
	非言語的コミュニケーションの積極的な活用	タッチングの効果を実感	13
		非言語的コミュニケーションを活用する	
	利用者の健康と安全を守る	利用者と視線を合わせてからコミュニケーションを始める	11
		利用者の健康管理	
	利用者が生活に楽しみや潤いを持てる関わり	残存機能を生かして支援する	7
		利用者の個性に合わせた個別的なケア	
	利用者が生活に楽しみや潤いを持てる関わり	利用者が楽しく感じられる雰囲気づくり	6
		利用者の集団レクへの参加をサポートする	
	利用者の自尊感情に配慮した関わり	利用者が自己決定できるように関わる	26
		利用者の立場で考えてケアを提供する	
多職種支援	多職種での協働支援	利用者のベースに合わせて対応する	6
		残存機能の活用で利用者の自己肯定感を高める	
		ポジティブな言葉選びで利用者の自尊感情を支える	
		利用者の自尊感情を支えることの大切さ	
多職種支援	多職種での協働支援	利用者の羞恥心に配慮して関わる	26
		利用者の役割や居場所を作る	
		利用者への感謝を伝えることが利用者の肯定的な感情につながる	
		集団生活での利用者同士の関係性に配慮して関わる	
多職種支援	多職種での協働支援	利用者のストレス発散	6
		専門職の協働体制	

ることを学んでいた。〈個人の理解度に合わせて説明する〉は「認知症の度合いや症状などの個別性を意識して、説明の方法をその人に合わせて考える必要がある」1コード、〈視覚情報や説明で利用者の理解を助ける〉は「不安を感じやすい方で作業を細かく、具体的に説明すること、また、その工程を視覚的に見せることで抱える不安が和らぐことがわかった」など5コード、〈利用者の混乱を防ぐ関わり方〉は「人との会話の中で、忘れていたということが理解できることから、後に混乱してしまう可能性がある。混乱を防ぐために、声かけをさり気なく行うようにしなくてはならない」など6コードで、学生は利用者の混乱を防ぎ理解を助けるよう、個々の認知機能低下や感覚器の低下に合わせた関わり方の工夫を学んでいた。

2) 《認知機能低下に伴う利用者の不安に配慮し、心に寄り添う関わり》

このカテゴリーは、〈利用者の感情に焦点を当てて関わる〉〈利用者の言動の向こうにある思いを汲みとり、不安にならないように対応する〉という2つのサブカテゴリーで構成された。

〈利用者の感情に焦点を当てて関わる〉は「高齢者の話が間違っていることを正すのではなく、共感して一緒に考えたりすることが重要」など4コード、〈利用者の言動の向こうにある思いを汲みとり、不安にならないように対応する〉は「どんな思いがそこにあるのかを汲み取り、恥ずかしさを感じてもらわないように、不安にならないような対処をしていくことが必要」など4コードで、学生は客観的な事実だけにとらわれず、利用者の不安な心情に配慮した関

わりを学んでいた。

3) 《相互作用の促進を目指す丁寧な対応》

このカテゴリーは、〈聴く姿勢を示す〉〈利用者が話しやすい雰囲気づくり〉〈利用者の個性やその時の心情に合わせてコミュニケーションをとる〉〈利用者の言葉を否定しないで受け止める〉という4つのサブカテゴリーで構成された。

〈聴く姿勢を示す〉は「発語が難しい利用者とのコミュニケーションで、はっきりと内容が理解できなくても、理解しようとしている姿勢を持って聞くことが利用者さんにも伝わる」など3コード、〈利用者が話しやすい雰囲気づくり〉は「笑顔で接し続け、自分のことも話すことで不安を和らげて話しやすい環境をつくる」など2コードで、学生は利用者の話への関心を態度で示すことで、話しやすい雰囲気を作っていた。〈利用者の個性やその時の心情に合わせてコミュニケーションをとる〉は「その方の性格やその時の状態に合ったコミュニケーションをとることが大切」など2コード、〈利用者の言葉を否定しないで受け止める〉は「（ほかの利用者の悪口を言うことは）聞いてほしいという気持ちもあると思うので否定せずまず話を聞くことも大切」など5コードで、学生は受容的な態度と利用者の心情に合わせた対応を心がけていた。

4) 《非言語的コミュニケーションの積極的な活用》

このカテゴリーは、〈タッチングの効果を実感〉〈非言語的コミュニケーションを活用する〉〈利用者と視線を合わせてからコミュニケーションを始める〉という3つのサブカテゴリーで構成された。



〈タッチングの効果を実感〉は「ボディタッチをすることで安心してもらえる」など4コード、〈非言語的コミュニケーションを活用する〉は「言語的コミュニケーションが難しい方には非言語的コミュニケーションを使って効果的に関わっていく」など4コード、〈利用者と視線を合わせてからコミュニケーションを始める〉は「正面から目線を合わせてふれあいながらコミュニケーションをとることで利用者さんに表情の変化や発語の増加が見られた」など5コードで、学生は非言語的なコミュニケーションスキルを用いた関わりを実践していた。

## 2. 【生活の質を高める多面的な支援】

このコアカテゴリーは、《利用者の健康と安全を守る》《利用者が生活に楽しみや潤いを持てる関わり》《利用者主体の生活に近づける対応》《利用者の自尊感情に配慮した関わり》《集団生活の場で生じる課題の解決》という5つのカテゴリーで構成された。

### 1) 《利用者の健康と安全を守る》

このカテゴリーは、〈利用者の健康管理〉〈残存機能を生かして支援する〉〈利用者の個性に合わせた個別的なケア〉という3つのサブカテゴリーで構成された。

〈利用者の健康管理〉は「その方の疾病や日頃の数値を把握した上で、個別性のアセスメントをすることは病院もグループホームも同じ」など3コード、〈残存機能を生かして支援する〉は「職員さんが身の回りのことをすべてするのではなく、洗濯物をたたむなどできることは利用者さんに頼まれていた」など6コード、〈利用者の個性に合わせた個別的なケア〉は「介護者が援助しやすいように、皆同じ部屋にするのではなく、その人にあった援助や対応ができるように個室を工夫されていた」など2コードで、学生は施設スタッフのケアに参加するなかで、利用者の健康と安全にかかわる支援の実践を学んでいた。

### 2) 《利用者が生活に楽しみや潤いを持てる関わり》

このカテゴリーは、〈利用者が楽しく感じられる雰囲気づくり〉〈利用者の集団レクへの参加をサポートする〉という2つのサブカテゴリーで構成された。

〈利用者が楽しく感じられる雰囲気づくり〉は「Fさんはひょっとして私がFさんの考えを否定したと感じてしまう」と思い、『これから良い人が見つかりますかね』など楽しい雰囲気になるように心がけた」など4コード、〈利用者の集団レクへの参加をサポートする〉は「恥ずかしがり屋なDさんには『一緒に歌いましょう』や『一緒にしましょう』などのサポートが必要でそのサポートを行った方が場の雰囲気も明るくなり、一緒に楽しむことができる」など3コードで、学生は利用者の個性や場の雰囲気に合わせて関わり工夫をしていた。

### 3) 《利用者主体の生活に近づける対応》

このカテゴリーは、〈利用者が自己決定できるように関

わる〉〈利用者の立場で考えてケアを提供する〉〈利用者のペースに合わせて対応する〉という3つのサブカテゴリーで構成された。

〈利用者が自己決定できるように関わる〉は「『あなたに任せるわ』と言われた際、『じゃあこれにしましょう』ではなく、『これはどうですか？』と自己決定を促し、支えること」など2コード、〈利用者の立場で考えてケアを提供する〉は「利用者はどう感じているだろうと常に考えることが大切で、より良いケアにつながる」1コード、〈利用者のペースに合わせて対応する〉は「相手が行動しやすいようにゴールまでのステップを踏むことや『気にかけているからいつでも話しかけてくださいね』といった声かけを行うことで、自分のペースで行動してくださる」など3コードであった。学生は、利用者の立場で考え、利用者の意思を尊重できる関わりの工夫を個々の利用者に合わせて具体的に学んでいた。

### 4) 《利用者の自尊感情に配慮した関わり》

このカテゴリーは、〈残存機能の活用で利用者の自己肯定感を高める〉〈ポジティブな言葉選びで利用者の自尊感情を支える〉〈利用者の自尊感情を支えることの大切さ〉〈利用者の羞恥心に配慮して関わる〉〈利用者の役割や居場所を作る〉〈利用者への感謝を伝えることが利用者の肯定的な感情につながる〉という6つのサブカテゴリーで構成された。

〈残存機能の活用で利用者の自己肯定感を高める〉は「できることをやってもらうことで達成感が得られ、自尊感情を低下させないことに繋がる」など6コード、〈ポジティブな言葉選びで利用者の自尊感情を支える〉は「自分が感じたことはポジティブな言葉で素直に表現していくことで、気持ちが伝わり、それが自尊感情を高めることにつながる」など7コード、〈利用者の自尊感情を支えることの大切さ〉は「自尊感情の低下は、本人に精神的な苦痛を与え、QOLが低下する要因になりうる。自尊感情を支えることが大切」、〈利用者の羞恥心に配慮して関わる〉は「帰宅願望やトイレにかかわる会話をするときは、大きな声で話さない、社会の場であることから配慮のある関わり」のそれぞれ1コード、〈利用者の役割や居場所を作る〉は「できることは利用者さんにやってもらい、“役割”があることで、自己肯定感の向上や自信の回復につながる」など6コード、〈利用者への感謝を伝えることが利用者の肯定的な感情につながる〉は「低下した自尊感情を支えるためには、何かしてくれた時には感謝の言葉を伝えることやできていることを認めることで前向きな気持ちになれる」など5コードであった。学生は、利用者の自尊感情への配慮の重要性を実感するとともに、自尊感情を支えるさまざまな支援を実践していた。

### 5) 《集団生活の場で生じる課題の解決》

このカテゴリーは、〈集団生活での利用者同士の関係性

に配慮して関わる〉〈利用者のストレス発散〉という2つのサブカテゴリーで構成された。

〈集団生活での利用者同士の関係性に配慮して関わる〉は「それぞれこだわりがある一人一人の自己決定を尊重し、希望をできるだけかなえながら、利用者同士のトラブルを防ぐように気を付けられている」など2コード、〈利用者のストレス発散〉は「利用者さんのネガティブ発言には必ず理由があり、発言をすることで頭の中を整理したりストレスの発散をすることができるため、発言をやめていただくことが大切であるとは限らない」など4コードで、学生は共同生活の場での人間関係のトラブルとそれに伴うストレスへの対応を学んでいた。

### 3. 【多職種支援】

このコアカテゴリーを構成するカテゴリーは、《多職種での協働支援》1つであった。「それぞれの専門的な立場を効果的に利用者に提供できるように体制が整えられている」という1コードから、サブカテゴリー〈専門職の協働体制〉とした。専門職の協働の有効性の学びを示す貴重なコードである。

## V 考察

### 1. 認知症グループホームで看護学生が学んだ「高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程」

実習総括記録に記された「高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程」に関する内容を分析した結果、【諸機能の低下に配慮して交流を促すアプローチ】

【生活の質を高める多面的な支援】【多職種支援】の3つのコアカテゴリーにまとめることができた。以下、コアカテゴリーに沿って考察する。

#### 1) 諸機能の低下に配慮して交流を促すアプローチ

このコアカテゴリーでは、利用者の認知機能低下と感覚器の低下によって生じる状況理解の不足やコミュニケーション障害に配慮し、受容的な態度と非言語的コミュニケーションを活用して、利用者との交流を促進する支援について実践を通じた学びが得られていた。

認知症グループホームでの実習の学習成果を報告した先行研究においては、戸惑いながらも認知症高齢者との接し方の基本を学んだことを示す《認知症のかたとの接し方の理解》<sup>9)</sup>や個人の理解と手段を考えることでの《コミュニケーション》<sup>8)</sup>というカテゴリーでまとめられている。先行研究はどちらも1週間程度の期間、1名の利用者を受け持ち、看護過程の展開を行う実習形態である。実習期間の違いはあるが、1人の利用者を受け持ち、連日関わりをもつ実習においても、認知症高齢者への関わり方に苦慮しながら学びを深めていることがうかがえる。A大学の实習においても、実習開始当初は同じ話題を繰り返す利用者とのコ

ミュニケーションに学生の戸惑いも大きいのが、実習終了時には、繰り返される話題は利用者への個別的な関わりにつながることを理解し、認知機能低下によるコミュニケーション障害と不安に配慮した関わりを実践していた。

《非言語的コミュニケーションの積極的な活用》では、A大学の老年看護学実習に取り入れているユマニチュードの学習<sup>13)</sup>の活用を思わせる学びも含まれていた。利用者の個性をふまえた具体的な関わり方の工夫と実践を学び得ており、コミュニケーションのスキルにとどまらない、利用者との交流を促進するアプローチであった。

受け持ちを持たない実習形態のため、学生は日々、9名の利用者との関わりを重ねている。全国データでは、認知症グループホーム利用者の要介護度は平均2.74、入所者の要介護度は半数が要介護1・2、半数が要介護3以上<sup>16)</sup>である。利用者の認知症の進行度も身体的な介護の必要度も様々ではない。学生は、利用者の認知症の進行度や認知症状の違いにも戸惑うが、その体験を通して利用者の個性を目の当たりにしており、認知症高齢者のその人らしさの理解を基にした学生にとって手ごたえのある学びといえる。

#### 2) 生活の質を高める多面的な支援

このコアカテゴリーでは、利用者の残存機能を生かして健康と安全を守る基本的な支援の方向性ととも、利用者が生活の主体として楽しみのある集団生活を送るための支援と自尊感情に配慮した関わりについて学びが得られていた。

先行研究において関連するカテゴリーとしては、看護過程の展開を通じて得られた《その人らしく生きることを支える個性の看護の重要性の理解》<sup>9)</sup>、安全を守る、自分のペースで生活するなどによる《生活援助の工夫》、利用者の立場に立って考えるによる《利用者にとっての最善の方法を模索する》<sup>8)</sup>というカテゴリーでまとめられている。看護過程を中心とした実習形態での学びと比べると、具体的な看護ケア方法に関する学びよりも、スタッフや学生自身の関わりや対応の工夫が利用者にとってどのような意味があったのかを考察した学びが多く散見されたことは、受け持ちを持たない実習形態であるA大学学生の学びの特徴といえる。

《利用者の自尊感情に配慮した関わり》や《利用者主体の生活に近づける工夫》のカテゴリーにまとめられた学びは、利用者の心情に配慮して利用者に合わせてかける言葉や言葉のかけ方など具体的な関わり方の工夫が記されていた。A大学の老年看護学実習では、ルーブリック評価指標を用いて実習体験を振り返る学内演習を取り入れており、その教育効果の1つに体験の意味づけが確認されている<sup>14)</sup>。自尊感情への配慮や利用者の主体性の尊重などは、必ずしも利用者の言動から成果が評価できるとは言えない支援である。学内演習でおこなう学生の実習体験の意味づけが、支援が利用者にもたらす意味の気づきにつながって

いることが推察された。

### 3) 多職種支援

このコアカテゴリーは、「それぞれの専門的な立場を効果的に利用者に提供できるように体制が整えられている」という1コードのみであった。利用者に関わるさまざまな職種が効果的に支援できる体制の存在を示す学びである。先行研究においては、事例を通じた《医療機関との連携についての理解》<sup>9)</sup>や多職種連携と看護職の役割での《看護職が配置される意味》<sup>8)</sup>というカテゴリーでまとめられている。今回、分析をおこなった専門職の援助過程の目標においては記述が少ない結果であったが、A大学看護学科老年看護学実習の実習目標には、「7.高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する」があるため、多職種連携による支援については、この実習目標により多くの学びが記載されていることが推察される。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

学生は、9名の利用者との関わりを重ね、高齢者の多様性を知ることによって利用者の個性の理解を深めていた。そして、利用者の個性に合わせて関わりや対応を工夫することは、利用者の生活の質に関わる重要な支援であることを学んでいた。A大学看護学科で実施している認知症グループホームでの臨地実習における専門職の援助過程についての学びは、受け持ちの利用者をもたない、特定の利用者の看護過程の展開をしない実習形態がもたらす特徴ある学びであることが確認できた。しかしながら、本研究は1学年の学生の学びの分析であるため、一般化には限界がある。継続的に調査を行うとともに、専門職の援助過程以外の実習目標についても、A大学の実習形態の特徴を確かめていくことが必要である。また、本研究の結果を学生の学習到達度の評価に活用していきたい。

本研究における利益相反に関する開示事項はありません。

## 謝辞

本研究にご協力いただきましたA大学看護学科の学生の皆さまに心から感謝申し上げます。  
なお、本論文は日本看護学教育学会第30回学術集会において発表した内容に加筆したものである。

## 文献

- 1) 内閣府: 令和元年版 高齢者白書, [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf), 2019-10-1.
- 2) 厚生労働省: 認知症施策推進大綱, [https://www.mhlw](https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf)

- [.go.jp/content/000522832.pdf](https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf), 2019-10-1.
- 3) 日本老年看護学会: 「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明2016, <http://184.73.219.23/rounenkango/news/pdf/老年看護立場表明（公開用）160820.pdf>, 2019-10-1.
- 4) 森幸弘, 中尾奈歩, 福田峰子, ほか3名: 老年看護学臨地実習における学生が認識する老年者とのコミュニケーション困難の内容と要因, 中部大学生命健康科学研究紀要, 14, 35-44, 2018.
- 5) 藤原李圭, 蓬詩織, 鈴木千絵子: 認知症高齢者の中核症状に対するイメージとBPSDへの対応知識および困難感について 看護学生のアンケートから, 関西福祉大学研究紀要, 21, 1-11, 2018.
- 6) 川上遥, 小松遥香, 中山朋美, ほか5名: 学生が初めて認知症患者と接したときに困難と感じたことの分析, インターナショナルNursing Care Research, 12 (1), 153-160, 2013.
- 7) 石垣範子, 深江久代, 今福恵子, ほか1名: 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 26, 43-55, 2013.
- 8) 道繁祐紀恵, 奥山真由美, 甲谷愛子, ほか1名: 介護老人保健施設およびグループホームにおける認知症高齢者に対する看護学生の学び, 山陽論叢, 21, 43-53, 2015.
- 9) 福岡真理, 小楠範子, 木村孝子: 認知症対応型グループホーム実習における看護学生の学びの実態, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 17, 43-48, 2013.
- 10) 棚崎由紀子, 光貞 美香, 田村 一恵: グループホーム実習に関連した看護学生の思いと認知症高齢者イメージの変化, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 5 (1), 37-42, 2012.
- 11) 上野まり, 廣川聖子, 間瀬由記, ほか1名: 認知症高齢者グループホームでの一日実習における看護学生の学び (第1報) 学生の実習記録から, 神奈川県立保健福祉大学誌, 6 (1), 3-11, 2009.
- 12) 木下香織, 古城幸子, 馬本智恵: 老年看護学臨地実習に導入した「利用者体験」の教育効果と課題, 看護・保健科学研究, 8 (1), 169-176, 2008.
- 13) 木下香織, 古城幸子: 認知症グループホームの臨地実習に導入したユマニチュードの効果 看護学生がとらえた入所者の反応からの評価, インターナショナルNursing Care Research, 14 (2), 145-153, 2015.
- 14) 木下香織, 古城幸子: 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その1) ルーブリック評価表の活用効果と演習方法における課題の明確化, 新見公立大学紀要, 35, 23-26, 2014.
- 15) 古城幸子, 木下香織: 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その2) 文献抄読演習の役立ちと学びの広がり, 新見公立大学紀要, 35, 7-12, 2014.

- 16) 厚生労働省: 介護給付費等実態統計平成30年度,  
[https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/  
kyufu/18/dl/11.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kyufu/18/dl/11.pdf), 2020-9-19.